



「牛」に関することわざ：
牛の何をどう捉えてきたか

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2012-01-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 馬場, 俊臣 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00007359

「牛」に関することわざ

— 牛の何をどう捉えてきたか —

馬 場 俊 臣

1 はじめに

「ことわざ」は、古くから言い伝えられてきた、教訓・風刺・真理などを含んだ短い言葉であり、様々な事物に対する人々の見方や捉え方が反映している。

本稿では、「牛」に関する日本のことわざを取り上げ、日本人は牛の何に注目し、どのように捉えてきたかを、体の部位別及び動作・性質別に分けて見ていく。本稿で取り上げることわざは『故事・俗信 ことわざ大辞典』（尚学図書（編）（1982））に基づいている。ただし、原則として中国の故事に基づくものや各地の俗信・俗説は取り上げない。

同書「総語彙索引」の「牛」の項には、216句のことわざ（俗信・俗説、言葉遊び・しゃれ、慣用語、故事を含む）が挙げられており、動物名を含むことわざの中でも数が極めて多い。

以下、「牛」に関することわざにおいて注目された牛の「体の部位」「動作・性質等」及びその捉えられ方（《 》内）を挙げながら、該当することわざを例示していく。（ ）内に示した解釈は上記『故事・俗信 ことわざ大辞典』を参考にしていく。関連する情報も随時補う。

2 体の部位

(1) 角

《無感覚》

- ① 牛の角の蜂／牛の角に蜂／牛の角を蜂が刺す／牛の角を蚊がせせる（何とも感じないこと。）

角については、「角の内部は、まず頭蓋骨の角突起があり、それを包むようにして角真皮、角鞘があります。この角鞘部分が年々どんどん伸びていくわけです。この部分には血管も神経もきていませんから、つねろうが切ろうが、ハチに刺されようが、ウシは一向に感じないはずです。」（佐草（1995） 57頁）とのことである。

《争い・強さ》

- ② 牛の角突き合い／牛が突き合いをするよう（仲の悪いものが事あるごとに争う

様子。)

- ③ 人衝く牛は角を切り人食う馬は耳を切る (人に突きかかる癖のある牛はその角を切り、かみつく癖のある馬は耳を切ってしまうし、危険を防止する。)
- ④ 春の一重西は牛の角も折れる (春先に吹く強い西風は一日かそこらで吹き止むが、固い牛の角が折れるくらい強い。)

日本の闘牛については、「用いる牛はすべて和牛の雄だが、黒毛和種が多く、短角種や褐毛和種、あるいは、それらの雑種も用いられることがある。体重八〇〇～一〇〇〇キロにもなろうという雄牛二頭を闘牛場で角を突き合わせ、一頭が敗走するまで闘わせる。」(津田 (2001) 270頁) とのことである。

《見栄え・よさ》

- ⑤ 牛は角を見て買入人は言を聞いて用う (牛は角によってその良否が分かるように、人の良否は言葉遣いや内容によって分かる。)
- ⑥ 角を直して牛を殺す／角を直すとして牛を殺す／角は直って牛が死んだ／角を助けんとして牛を殺す／角を矯めて牛を殺す (曲がっている牛の角をまっすぐしようとして、牛を殺してしまうことから、少しの欠点を直そうとしてかえって全体をだめにする。)

「角を直す」ことについては、「矯角をすることは、現時では大多数に於いて不要になってきている。以前は、登録検査や共進会を意識して、殆どの雌牛には、矯角が行われていた。現在でも、それらの影響を意識して実施しているケースを見かけることがある。そもそも矯角とは、子牛から成畜への成長段階に伸びる牛の左右の角を、大きさ形、角度伸びる方向などを一対として同じ形状にバランス良く整えることである。だから、矯角された牛の角は、見るからに格好良く見えるのである。」(「牛コラム」(<http://blog.goo.ne.jp/kuroiusi/>)) とのことである。

(2) 鼻・鼻輪 (鼻環)

《自由を失う・苦しみ》

- ① 牛と芥子は願いから鼻を通す／牛は願いから鼻を通す／牛の願いも鼻／牛は我が心から鼻へ縄を通す (自ら望んで苦しみを受けること。)
- ② 馬に轡、牛に鼻面 (自由を妨げるものがそれぞれにあること。)
- ③ 継母と牛殺しの木によく伸びたるはなし (「木」と「氣」をかけて、継母に氣のいい人はいないということ。)

鼻輪については、「トラクターなどの農業機械が農村に普及する昭和30年代頃までは、畑仕事や荷運びなどの力仕事に牛は欠かせない労働力だったのです。牛の鼻輪は、こうした農作業の際に牛にいう事を聞かせたり、爪切りや、病気の治療などの管理の際に体の大きな牛を扱いやすくするために大変役に立つ物でした。」「最近では、農家一軒あたりの牛の頭数が増えて、牛舎の構造や、管理のやり方が変わり、牛に鼻輪をつけずに飼う牧場も増えてきているようです。

時代と共に人と牛のつきあい方も少しずつ変わっていくという事でしょうか。」
(農林放送事業団「なるほど畜産情報」(<http://www.agriworld.or.jp/chikusan/>))
とのことである。

(3) 涎

《だらだらと長く続く》

- ① 牛の涎／牛の涎は十八町／牛の涎は百里続く（だらだらと長く続くこと。）
- ② 商いは牛の涎／商売は牛の涎／あきんとは牛の涎（気長に根気よく続けるのが商売のこつだ。）

涎については、「だ液分泌量は体重一キログラムあたり人間の約一〇倍である。一日量で人間は一〜二リットルだが、ウシは一〇〇〜一八〇リットルも分泌する。ヒトでは食事や何か食べた時にだ液の分泌量が増すが、ウシはえさを食べたときも分泌は増すが、それ以外の時にも絶えず分泌されていて一日中、とぎれることがない。」(津田(2001) 30頁)とのことである。

(4) 陰囊（ふぐり）

《落ちそうで落ちない》

- ① 落ちそうで落ちぬ物は二十坊主と牛の睨丸、落ちそうもなくて落ちる物は五十坊主に鹿の角／四十坊主は鹿の角二十坊主は牛の陰囊／二十坊主と牛の陰囊／二十坊主と牛の金玉（年の若い僧侶は修行が足りないので容易に墮落しそうだが、案外志操が堅固であり、年とった僧の方が堅固のように見えて意外に墮落しやすい。）

(5) 尾・尻

（部位それ自体）

- ① 馬は蹄の腐るまで浮く、牛は尾の腐るまで浮く（馬も牛も水には強いこと。）
- ② 牛の尾に茶碗を継ぐ／牛の尻に茶碗を継ぐ（不可能なこと。）

(6) 鞞（しりがい）

《外れそうで外れない》

- ① 牛の鞞／牛の鞞と諺とは外れそうでも外れぬ（一見外れそうで外れないこと。）
- ② 親の諫めと牛の鞞は外れそうで外れぬ（親の子を見る目には間違いがないから親の諫めを無視してはいけない。）
- ③ 年寄りの言うことと牛の鞞は外れたことがない（老人が経験から将来を見通して言う言葉に間違いはない。老人の意見には耳を傾けるべきだ。）

(7) 小便

《だらだらと長く続く》

- ① 牛の小便／牛の小便十町／牛の小便十八町（だらだらと長く続くこと。）
- ② 牛の小便と親の意見は長くても効かぬ（牛の小便は長いばかりで肥料としてはききめは少なく、親の説諭も長いばかりで効果がないこと。）

糞尿については、「実際にウシの糞尿がどれくらい多いかを、ウマの場合と比べたデータがありますので紹介します。それによると、ウマの成獣一日の糞の量は一五～二〇キロなのに対し、ウシでは二〇～三〇キロと多めです。尿の量に関してはその差がもっと顕著で、ウマは一日あたり四～六キロ程度ですが、ウシでは何と一〇～一五キロも排泄するのだそうです。」（佐草（1995） 58頁）とのことである。また、「牛一頭からのふん排せつ量は人間一九〇人分、尿は六人分、ふん尿合わせて計算すると三〇人分と換算されている。」（津田（2001）188頁）とのことである。

(8) 糞（くそ）

《役立たない》

- ① 蒔絵の重箱に牛の糞盛る（立派な入れ物に粗悪な物を入れる。形式と内容があまりにかけ離れていること。）
- ② 牛の糞も味噌も同じ合点（賢愚玉石など全く別々のものを同一視する浅慮。）
- ③ 良い時は牛の糞が味噌となる（運のいいときはどんなことでもすべてうまくいくこと。）
- ④ 法華が仏になるならば牛の糞が味噌になる／法華が仏になるならば犬の糞が肥になる／牛の糞が味噌になる（日蓮宗をあざけて言った言葉。）

《柔らかい・水分が多い》

- ⑤ 甲州兵衛と牛の糞には油断すな（甲州人と、道に落ちている牛の糞には、共に足をすくわれるから気を許してはいけない。甲州人の抜け目なさをいう。）
- ⑥ 牛の糞（外側はかたいが内側はやわらかいこと。特に、女性との交際に関して見かけと実際のちがう、油断のならない者をいう。）

糞については、「ウシの糞は表面から順に非常にゆっくりと乾いてくるものです。だから、たとえ表面が堅く乾いているからといっても、決して中の方まで乾いているとは限らないのです。放牧場などを歩いていると、ボタボタ落ちているウシの糞に出くわすことがあります。こうした糞はかなり固まっているように見えても、決して踏んではならない……というのが、牧場関係者の間では常識となっています。一見乾いているように見える糞でも、もし、何かの弾みで踏みつけてしまうと、まずは九割方は中がまだベトベトで、長靴を臭い糞まみれにすることになるからです。」（佐草（1995） 60頁）とのことである。

- ⑦ 牛の糞に火の付いたよう／牛糞に火の付いたよう（ぐずぐずして、ものが一向に進まないこと）

ちなみに、インドでは牛糞は燃料としても利用されており、「牛ふんは、ゆっくりと長く燃え、食物を焦がすことがない。また、よごれた床に牛ふんを塗り

付けておくと、だんだんと乾燥し、それを掃き出すことで床の掃除ができるともいう。」(津田 (2001) 116頁) とのことである。

《段階》

- ⑧ 牛の糞／牛の糞にも段階／牛糞も段階 (牛の糞が段階になっていることから、物事には順序・段階があること。)

(9) 毛色

《真っ黒》

- ① 牛掴むばかりの暗がり (何が何だか分からないほど真っ暗闇であること。)
② 暗がりから牛／暗がりに牛繫いだよう (物の区別がつかないこと。)
③ 夜目には牛の毛も白い／夜は牛の毛も白う見ゆる (夜見るときは、物の色も定かではない。また、はっきりと見えないので実際よりもよく見えるものだということ。多く女性の容姿・容貌について言う。)

日本在来の牛の毛色については、「在来牛の多くが現在の黒毛和種と同じような黒毛のウシであったと考えられます。白黒斑や褐色のウシも描かれており、在来牛に毛色の変異があったことは間違いありませんが、その数は少なかったと思われます。これは、文献からも裏付けられます。」(奥州市牛の博物館「牛の博物館のホームページ」(www.isop.ne.jp/atru/mhaku.html)) とのことである。

(10) 体格

《大きい》

- ① 牛ほどな蚤 (おおげさすぎる表現のこと。)
② 牛を搏つのは以て虱をやぶるべからず (牛を刺し殺すほどの虻でも虱を殺すことはできない。大きなものを倒すことはできても、小さなものはかえって殺すことが難しい。)

3 動作・性質等

(1) 寝る

《寝ていることが多い》 《怠惰》 《寝る牛がよい》

- ① 牛に成る／飽くまで食うて寝れば牛になる／御飯を食べて直ぐ寝ると牛になる／食ってすぐ寝ると牛になる／寝たまま物を食べると牛になる (不行儀・不健康の戒め。お腹一杯食べてすぐ寝ることの戒め。)
② 馬は立つほど飼え、牛は臥るほど飼え (馬は勢い立つほど餌を与えろ、牛は横になるまで餌を与えよの意。)

反芻については、「ウシは一日に六～一〇時間、平均八時間ほど反芻している。夜など暗く、静かな時間帯に反芻することが多い。反芻は睡眠 (徐波睡眠) 中にも生ずる」(津田 (2001) 28-29頁) とのことである。

なお、人間については、「食べてすぐに横になることは、本当に悪いことなのでしょう。食後すぐに動き出す事は、筋肉に血流を取られますから、胃腸や肝臓にとっては負担が多くなるために好ましくありません。食後安静にしていることは、むしろ勧められることです。ただ、本当に横になる事は、場合によっては（食道裂孔ヘルニアのある場合など）、逆流性食道炎の原因となるために、避けた方が良いでしょう。」（土川内科小児科「医学常識のウソ？ホント？」（<http://www.nms.co.jp/uso/uso.html>））とのことである。

(2) 動き

《遅い・のろい》

- ① 牛の歩み／牛の道行き（進み具合や動きの遅いこと。）
- ② 牛を引く（怠ける様子。）
- ③ 将棋は早馬碁は牛の如し（将棋の勝敗が決まるのは早い、碁の方はなかなか決まらないこと。）
- ④ 暗がりから牛／暗がりの牛／闇の夜の牛／暗闇から牛を引き出す／闇から牛を引き出す／暗闇へ牛を引き出す（動きがのろい牛を暗がりから出すとさらにぐずぐずすることから、動作が鈍い様子。）
- ⑤ 牛の籠抜けをするよう（鈍重で手際の悪い様子。）
- ⑥ 男と牛の子は急ぐものでない（男はゆったりしているのが立派で、こせこせするのは見苦しい。）（この場合は、遅さが肯定的に捉えられている。）

《長く着実》

- ⑦ 早牛も淀、遅牛も淀（どうやってみても結果は同じであること。）
- ⑧ 牛も千里、馬も千里／早い馬も千里のろい牛も千里／牛の歩みも千里（怠らず続ければ成果があがること。）

牛による運搬については、「牛による物資の輸送は日本各地で行われていた。」（津田（2001） 62頁）、「牛のもう一つの大きな役目に荷物の運搬があった。米その他の物資の遠距離の輸送には、背に荷をくくりつけて、荷駄として運ばせた。急坂や泥濘にもよく耐えて歩いた。馬も使われたが、馬は比較的短距離用で、牛は細い道もよく歩き、野宿する場合も馬より容易であった。」（同59頁）とのことである。

《瞬発力》

- ⑨ 牛の一散（ふだんは決断の鈍い人がややもすれば深い思慮もなく無闇に急ぎ進むことがあること。）
- ⑩ 黄牛（あめうし）に腹衝かる（「黄牛」は牝牛の異称。油断して思いがけない相手にやられること。）
- ⑪ 牛部屋の吹き矢（牛部屋で吹き矢をすると牛にあたって暴れだす危険があることから、きわめて慎重に行動しなくてはならないこと。）

動きについては、「ウシはいざとなったら普段の態度からは想像できないよ

うなスピードとパワーを発揮することがあります。特に何かに脅えたり驚いたりした時には、火事場の馬鹿力を発揮して普段はとても飛び越せそうもない柵を一気に飛び越したり、牛舎の壁板を破壊して逃げ出す……なんてことも平気でやってのけるほどなのです。」(佐草 (1995) 52頁) とのことである。

(3) 性格

《浅慮》

- ① 女の利発牛の一散 (女はいくら利口だといっても、牛が急に走り出すように思慮が浅く、はやるだけであるということ。)
- ② 牛の一散と女子の知恵とは用に立たぬ (ともに思慮の浅いこと。)

《すねる》

- ③ 座頭は牛七匹ほどすねる (牛はすねる性質を持っていると言われるがその牛の何倍もすねるということから、座頭のひがみ心が強いこと。)

《努力》

- ④ 猿知恵牛根性 (利口のように見えるが、どこか間の抜けている猿知恵と、牛のように鈍重で強情ではあるが、こつこつと努力する性質。まったく正反対であること。)

(4) 転生

《坊主の生まれ変わり》 《悪行の報い》

- ① 牛は坊主の生まれ変わり／坊主の生まれ変わりは牛となる (牛の飼料になまぐさ気がなくまた魚の骨が入っても牛は食わないと言われることを、僧侶の食生活に関連づけていったもの。または坊主は淫欲の強い者であるとされているところから、淫欲の強いといわれる牛にかけていったもの。)
- ② 隠悪の僧死して牛に生を変ゆる／破戒の出家は牛に生まれる (悪事を働いたり戒律を守らなかったりする僧は、死ぬと牛に生まれ変わる。僧の品行の戒め。)

牛と僧との繋がりについては、『日本霊異記』などの仏教説話集の因果応報譚で多く取り上げられており、「前世で、物を盗んだり、借りて返さなかったりして、そのまま死ぬと、現世では牛となって生まれ、働かされるという話が多い。たまたま、だれかが気がついて供養してくれると、現世の苦しみから免れ、罪が許されて死んでしまう場合、そのまま人の前から消えてしまう場合、あるいは憎まれたままで、また死んでしまう場合などがある。」(津田 (2001) 203-204頁) とのことである。

(5) 価値 (主に「馬」と比べて)

《馬より劣る》

- ① 馬に乗るまでは牛に乗れ (低い地位にあって力をつけてから高い地位につくのがよいこと。)

- ② 牛売って馬を買う／牛を馬に乗りかえる／牛を馬に換う／牛を以て馬に換う（優れたほうに取りかえること。）
- ③ 馬を牛に換える／馬を牛に乗り換える（優れたものを捨てて、劣ったものに換えること。）
- ④ 馬を買わんと欲してまず牛を問う／馬を問わんと欲してまず牛を問う（高価なものや値の分からないものを買うときは、身近なものの値段からその店の掛け値を知れという意。）

《馬との差なし》

- ⑤ 牛に馬を乗り換える（牛と馬に優劣の区別をつけず、どちらの場合でも、劣ったものから優れたものに乗り換えること。）（ただし、馬を優れたものとする解釈もある。）
- ⑥ 馬に混じりたる牛（他の者とはひとりだけ別物で、仲間はずれの状態にあること。）
- ⑦ 馬の頭に牛の頭（異なる物を混同して区別しないこと。）
- ⑧ 馬は逆風を喜び、牛は順風を喜ぶ（色々な点で馬と牛の性質が逆であること。）
- ⑨ 馬を牛と言う／牛を馬と言う（権威を笠に著て、筋道の通らないことを無理に押し通すこと。）

《価値が低い》

- ⑩ 牛に経文／牛に説法、馬に銭／牛に向かって経を説く／牛に麝香、猫に小判／牛の前に調ぶる琴（いくら説き聞かせても何の効き目もないこと。）

《価値が高い》

- ⑪ 牛が悶えず蛇が悶える（高位高官の人が国を憂えず、かえって一般の人が取り越し苦勞すること。）

(6) その他

《売買の対象として》

- ① 牛売って牛にならず（牛を売った値段で代わりの牛を買おうとしても金額が足りないことから、買い換えると損をすること。）
- ② おなご賢しくて牛売り損なう／女賢くして牛売り損なう／女賢くして牛売られぬ／女発明で牛の値が下がる（女が利口ぶってでしゃばると、かえって浅知恵を見すかされ失敗すること。）
- ③ 童賢くして牛売り損なう／童小賢し子牛売られぬ（子供が利口ぶって口出しするのは何の役にも立たず、かえって事態を悪くする。）

牛の売買については、「牛馬の取引には種々の特別な慣行があり、また多数の隠語や符丁が用いられて、その一部は現代の家畜市場の慣習にも残っている。」（日立デジタル平凡社『世界大百科事典』（CD-ROM）1998年、「ウシ」の項）とのことである。

《食べられる動物として》

- ④ 牛を食らう気／虎子地に落ちて牛を食らうの気あり／虎生まれて三日にして牛を食らうの気あり／虎の子は地に落つれば牛を食う気あり／蛇は生まれ乍らにして牛を呑む気あり（虎や蛇の子は小さいときから牛を食うほどの気性をもっていられることから、幼いうちから強いまたは大きい気性があること。才知のすぐれた人は、幼少時よりその片鱗を示すこと。）

4 そのほかのことわざ

2節及び3節で取り上げてきたことわざ以外にも「牛」に関することわざは数多くある。

- 牛に乗って牛を尋ねる（求める物が身近にあるのに気付かないで、遠くまで求めるような無駄な努力をすること。）
- 牛追い牛に追わる（物事がさかさまになること。）
- 牛に引かれて善光寺参り（思いがけないことが縁で、また、自身の発意ではなく、偶然よい方に導かれること。）
- 牛にも馬にも踏まれぬ／牛馬にも踏まれぬ（子供が無事に成長していく様子。押しも押されもしない様子。）
- 牛は牛連れ／牛は牛連れ、馬は馬連れ（似たもの同士が自然に集まること。身分相応のものが一緒に行えばうまくゆくこと。）
- 牛馬三十日鼻二十日（牛や馬は三十日で飽きがくる、自分の女房は二十日で珍しくなくなることから、飽きやすいこと。）
- 牛追いに時雨（似つかわしい景色の取り合わせ。）
- 馬は上等の馬に乗り、牛は中等の牛を用い、人は下等の人を使え（それぞれに使いやすいこと。）
- 牛の子に味噌（牛の子が生まれたとき、その皮膚に味噌を塗って親牛になめさせる風習から、好物のたとえ。）

親牛が子牛をなめることについては、牛の反芻胃の中のいる「プロトゾア」（他の微生物とともに飼料を消化する役割を担っている原生動物は）が体外ではすぐに死滅してしまうので、飼料や空気から子牛の体内に入ることはなく、親牛から移してもらうしか方法がなく、親牛が子牛をなめることによって「親の口内にあった胃内容中のプロトゾアが、子に移り、飲み込まれ、子の胃内で増殖を始める」のであり、「親牛は単なる愛情の表現としてだけでなく、ある実際的な目的のために子牛をなめていることになる。」（津田（2001） 72頁）とのことである。

5 終わりに

牛は古来より日本人に非常に身近な動物であり、体の部位や動作・性質などが細

かく観察されその捉え方がことわざに反映されている。

他言語についても、その言語社会での「牛」の位置づけに応じて、独自の捉え方がされているであろう。『世界14言語動物ことわざワールド 捕らぬ狸は皮算用?』(亜細亜大学ことわざ比較研究プロジェクト(編)(2003))や『世界ことわざ大事典』(柴田・谷川・矢川(編)(1995))に基づけば、たとえば、モンゴル語の「正直に進めば、牛車でウサギに追いつく」、中国語の「のろくても立ち止まらなければ、老いた牛でも山に登れる」、アフリカンス語の「一番最後の牛も柵に入る」などは、日本語の「早牛も淀、遅牛も淀」などと同じく「牛」の《着実》さを肯定的に捉えたことわざである。このように日本語のことわざの「牛」の捉え方と共通することわざも多い。一方、日本語のことわざとは異なった捉え方をしていることわざも多く、たとえば、モンゴル語の「昼失って夜に、牛を失って羊を(牛という大事なものを失って、価値の低い羊を探す。)」では牛を「もっとも価値が高い家畜」として捉えており、また、ヒンディー語の「乳だす牛には、蹴られても心地よい(役立つものに対しては少々不愉快なことも許せる。)」やウクライナ語の「やたら鳴く雌牛は乳の出が悪い(口数の多い人は仕事の量が少ない。)」やデンマーク語の「牛はたとえ黒くても、白いミルクを出す(平凡な親が優れた子を生むこと。人は見かけで判断すべきではないこと。)」では「乳牛」としての価値の高さを捉えている。ことわざを通して、言語文化ごとの様々な捉え方を知ることができる。

注 本稿は、平成21年度北海道教育大学札幌校公開講座「文学に見られる身近な動物たち(V)——ウシ—— 第3回 現代日本語に見られるウシ——ことわざ・慣用句など——」(平成21年8月15日)の講演資料の一部に修正を加えたものである。

主要参考文献

- 亜細亜大学ことわざ比較研究プロジェクト(編)(2003)『世界14言語動物ことわざワールド 捕らぬ狸は皮算用?』白帝社
- 佐草一優(1995)『ウソ・ホント? 動物ことわざ事典』ビジネス社
- 柴田武・谷川俊太郎・矢川澄子(編)(1995)『世界ことわざ大事典』大修館書店
- 尚学図書(編)(1982)『故事・俗信 ことわざ大辞典』小学館
- 津田恒之(2001)『牛と日本人——牛の文化史の試み——』東北大学出版会